

### はじめに

著名なオーディオ評論家でいらっしゃる小原様が、ご自宅を新築される際に仕事場となる視聴室の工事を弊社で担当させていただきました。その際、お打合せから、設計、施工、最終の性能確認まで長くお付き合いさせていただいたことから、今回、サウンドクリニックマガジンの記念すべき第一号(自分のところで言うのもなんですが)にご協力いただけないですかとお願いしましたところ、快くお引き受けいただきました。



### 反射に感謝、遮音への謝恩～僕が日本板硝子環境アメニティに仕事を依頼した理由とその顛末

日本板硝子環境アメニティに設計・施工していただいた室内で仕事をし、素晴らしい遮音性能とルームアコースティックの恩恵に与っている僕が日々痛感しているのは、月並みだけれども、室内音響性能の重要さである。それはオーディオ/AV機器と同等、あるいはそれ以上にパフォーマンスを左右し、その結果得られる満足度の差として表れる。僕たち日本のオーディオファイルやAVファンは、もっと部屋のコンディションに気を使うべきだ。

どれだけ優れた演奏家であろうとも、響きのよくないホールでの演奏は気乗りしないはずだ。ましてやそこで録音するようなことになれば、いくら優れた録音機材を

用意しようとも、決して高音質は期待できないだろう。それと同じだ。最高のオーディオ機器を揃えたにも関わらず、フラッターエコーが盛大に発生していたり、床がやわだったり、遮音性能が悪い部屋では、決していい結果は望めない。

つまり、アンプやスピーカーと同様、部屋もひとつのコンポーネントとして捉えるべきなのである。

そもそものきっかけは、1989年の熱かった夏に遡る。

僕は、新しいAV(オーディオビジュアル)誌の立ち上げに参画し、とある出版社に転職したばかりで、その編集部内に視聴室を設けるに当たって業者との折衝を担当していた。“アイミツ”(同じ内容で数社に見積もりを依頼し、比較するあれです)を取るべく、いくつかの音響建築設計会社に電話連絡した中に、日本板硝子環境アメニティ株式会社(以下NEA)があった。

この、口に出してフルネームできっちり読もうとすると、舌を3回ぐらい噛みそうな長い社名の営業担当者と数回お会いし、その人柄のよさと確かな施行例から判断し、当編集部視聴室の工事をお願いすることになった。

建物の都合上、部屋は少し細長いスペースだったが、試聴や測定にはずいぶんと重宝した。だが、残念ながら雑誌の収支は芳しくなく、3号目を発行したところで廃刊、編集部は閉鎖となってしまったのだった。

落ち込んでいた僕を、NEAの営業担当者はスペイン料理屋に連れていってくれ(しかも自腹で!)、励ましてくれたのだった。あの時食べたパエリアの濃密な味は、今でも決して忘れない。

それから3年後、偶然と幸運も重なって、僕はオーディオビジュアル評論家として一本立ちすることとなり、また一方で、家内の実家に居候することも決まって(つまり、「サザエさん」のマスオさんの境遇)、その増築の機会を捉まえてこれ幸いと、防音を施した視聴室を構える決断をした。併せて、自宅でパエリアの真似事をして

いた時にハッと思い出し、以前お世話になったNEAの営業担当者に連絡を取り、僕の視聴室の設計と工事をお願いしたのであった。

1992年春に仕事場は完成した。何も処理しなければ12帖ほどのスペースが確保できたのだが、空気層を設けた遮音壁で四方を覆ったため、有効スペースは10帖弱となった。特別な調音は何も施さず、遮音/防音に努め、高層ビル用二重サッシや防音ドア「SD-40」を施行。スピーカーの後壁は全面「ソノカット」で仕上げ、その対向の壁にはレコードラックを作り付けた。

僕はそこで約14年間仕事をした。スペース的に余裕があったのは最初の5年ほどで、エレクトロボイスの劇場用スピーカーを使い始めた頃から次第に手狭になってきた。スピーカーをPMCのMB1で5ch揃えた時(98年末)には、一時的に広くなったものの、新たに導入したオーディオ機器がその空いたスペースを次第に侵食していった。

何とかしなければ仕事に支障をきたすと思い始めたのが、2001年頃。新たに住まいを構えるべく、土地探しから始め、クルマで10分足らずの場所に願ってもない条件の土地を見つけたのが2002年の秋頃。家屋全体の諸々の計画は2004年の秋からスタートした。

好意にいただいたNEAの営業マンが既に退社していたため、新居の仕事場は建築音響グループの営業マンEさんに担当していただくことになった。無類の音楽好きで、JBLスピーカーの大ファンでもあるEさんとはすぐに意気投合。視聴室設計が始まったのが、2005年1月中旬である。



設計担当のKさんやTさんを交えた第1回目の打合せで当方から要望したのは、大まかに以下の7項目だ。

- 1) 遮音性能はD - 65 ~ 70を目指す
- 2) 残響特性は、ややデッドぎみ
- 3) 正面は吸音壁とし、デッド。後面は全面的にソフトラック
- 4) 側面は珪藻土仕上げで、音響パネルが可動できるようにする
- 5) 床はコルクタイル仕上げ。コンクリート浮き床構造とし、中央付近に配線用ピットを設ける
- 6) 側壁面は巾木ピット
- 7) 天井はジャージクロスパネル仕上げの吸音構造

Kさん、Tさんの設計陣は、僕からの要望をすべて採り入れてくれたうえで、よりベターな方法、あるいはローコストに仕上げられるアイデアをいろいろと提示してくださった。当方の要望がオーバースペック(過剰)だったり、設備や仕上げが高額になったり等、いくつかの要件は諦めねばならなかったが、提示された代替案も大いに魅力的で、仕事部屋のアウトラインは次第に固まっていった。

NEAの魅力は、そんな風にたくさんの引出しを持っていることだ。これは、豊富な実績と長年に蓄積されたノウハウがモノをいうのだろう。雑誌等に掲載されている視聴室/ホームシアタールームの施行例を見ていると、判を押したように同じパターンの仕上げや機構を見ることがある。ハハーン、これはあそこのインストーラーの施行だなあと、だいたいは読めてしまうのだが、NEAが手掛けたケースはひとつとして同じパターンがない。顧客のニーズに沿うという視点からしても、これは凄いことだと思う。

打ち合をを重ねていく過程で、予算と見積もりを照らし合わせながら、コストを抑える部分と、仕様/性能を落とさたくない部分とをきっちり分けていった。例えば、コルクタイルの床は、厚さを当初予定の5mmから3mmに変更してより安価に収める。また、エアコンを倉庫に吊り、ダクトを延長して冷暖房を行なおうとした点も、低騒音タイプを天井に直に設置することで妥協した。

遮音性能もD - 60で問題ないだろうという判断。一方、駐車場からダイレクトにアクセスできる防音ドアは、利便性の点で譲れない部分であったし、床に施工したかった配線用ピットも、幅を多少狭めても絶対にほしい機構であった。

頻繁に図面を製作し、確認を求めるNEAの姿勢にも感服した。設計図面だからプリントする判型もそれなりに大きなものになり、手間もコストもかかるわけだが、それを些かも厭わないのは、企業としての見識といえよう。もちろん打ち合せの都度に議事録を作成していただき、双方で確認し合ったことはいうまでもない。

全体像が固まってくると、作業工程表が出来上がってくる。ここまでくると一安心という感じだが、家屋本体の作業工程との兼ね合いもあるので、そうそう一筋縄にはいかない。また、ここで肝心なのが、家全体を任せている建築会社の現場監督と、NEA管轄分を見る現場監督と、ひとつの現場に二人の現場監督が居合わせる。つまり、双方のコミュニケーションが問題となる。幸い我が家の場合、建物全体を見る工務店のHさんの親分気質と、NEAのMさんの温厚なキャラとがうまくマッチし、スムーズに進んだように思う。

2006年6月下旬、新しい仕事場は無事完成した。普通のインストーラーに依頼した工事ならば、引渡し後にこれで終わりということになる。しかし、NEAは違う。作り放しでないところが、NEAの真骨頂。設計通りに部屋ができているかどうか、計測のスケジュールが設定されるわけだ。

ここで机上の設計と現実の施工内容とが照合されるわけだが、おそらく施主はここでNEAの実力の高さに舌を巻くことだろう。

僕の仕事部屋は、設計上の意図がほぼそのまま実測データにも表れていた。ややデッド気味の残響特性、D - 60が維持できた遮音性能など、当初の目的通りである。

さらに驚かされたのは、室内の周波数特性に際立ったピーク/ディップが発生していないことだ。密閉性の高い室内では、一般に50Hzから100Hz近辺で急激なピーク/ディップが生じやすいのだが、それがまったく見られなかった。これもまた多くの施工実績の賜物といっていいたいだろう。



おざなりな言い方だが、建築における実績と経験は、専門性の強い音響建築では極めて重要なことである。すなわち、それが最大のセールスポイントであり、他社との差別化における絶好の武器となるからだ。冒頭で「部屋もひとつのコンポーネントとして捉えるべき」と記したが、NEAが提供する部屋は、まさしくハイエンドオーディオ機器に匹敵するクォリティーを有すると僕は思う。

公私を含め、NEAに過去三回お世話になった僕が、もしもまたオーディオルーム/ホームシアターを設けることになったならば、迷うことなくNEAに施工を依頼する。これは揺るぎない。

本書の写真は、株式会社ステレオサウンド様のご好意で、ホームシアターvol.35 の写真を掲載させていただきました。本当にありがとうございました。なお、お部屋の様子や工事などに関しては、ホームシアターvol.29 ~ 38(現在も連載中)に細かく掲載されています。